

**中小企業・小規模事業者の
生産性向上に向けて
～業種・規模別の企業分析～**

令和元年10月3日

経済産業大臣

菅原一秀

大企業と中小企業の売上高・粗利益の伸び率の比較

- 全産業ベースでは、売上高・粗利益は共に伸びているが、業種ごとに伸び率に差がある。

1社当たり売上高の伸び率

(‘10~12年度平均と、‘16~18年度平均の比較)

| | | 大企業 伸び率[%] | 中小企業 伸び率[%] | 差 (大-中小) [%pt] |
|--------------|-------|---------------|----------------|-------------------|
| 全産業 | | 9.4 | 6.6 | 2.7 |
| 伸び率に差のある主要業種 | ①広告 | 21.0 | -34.2 | 55.2 |
| | ②印刷 | 23.6 | -7.6 | 31.2 |
| | ③自動車 | 23.4 | 9.3 | 14.1 |
| | ④情報通信 | 21.4 | 7.4 | 14.0 |
| | ⑤鉄鋼 | 5.0 | -7.5 | 12.5 |

1社当たり粗利益の伸び率

(‘10~12年度平均と、‘16~18年度平均の比較)

| | | 大企業 伸び率[%] | 中小企業 伸び率[%] | 差 (大-中小) [%pt] |
|--------------|--------|---------------|----------------|-------------------|
| 全産業 | | 21.1 | 11.0 | 10.1 |
| 伸び率に差のある主要業種 | ①自動車 | 67.5 | 17.0 | 50.5 |
| | ②印刷 | 35.9 | -9.9 | 45.8 |
| | ③建設 | 74.4 | 42.4 | 32.0 |
| | ④広告 | -4.4 | -32.5 | 28.1 |
| | ⑤食料品製造 | 11.6 | -14.5 | 26.1 |

資料：財務省「法人企業統計」

(注) 各業種内における大企業（資本金10億円以上）と中小企業（資本金1億円未満）との比較で、実際の取引構造までは考慮していない点に留意が必要。

大企業と中小企業の人件費・設備投資額の増減の比較

- 全産業ベースでは、人件費・設備投資額共に上昇しているが、業種ごとに増加額に差がある。

1人当たり人件費の増減

('10~12年度平均と、'16~18年度平均の比較)

| [単位：万円/人] | | 大企業 増減 | 中小企業 増減 | 差 (大-中小) |
|-------------|--------|-----------|------------|-------------|
| 全産業 | | 14 | 3 | 11 |
| 増減に差のある主要業種 | ①広告 | 59 | -26 | 85 |
| | ②窯業 | 79 | 5 | 74 |
| | ③金属製品 | 46 | -19 | 65 |
| | ④生産用機械 | 53 | 4 | 49 |
| | ⑤自動車 | 61 | 17 | 44 |

1人当たり設備投資額の増減

('10~12年度平均と、'16~18年度平均の比較)

| [単位：万円/人] | | 大企業 増減 | 中小企業 増減 | 差 (大-中小) |
|-------------|----------|-----------|------------|-------------|
| 全産業 | | 46 | 17 | 30 |
| 増減に差のある主要業種 | ①運輸・郵便 | 183 | 36 | 147 |
| | ②生活関連・娯楽 | 68 | -28 | 96 |
| | ③鉄鋼 | 87 | 1 | 86 |
| | ④食料品製造 | 98 | 14 | 83 |
| | ⑤自動車 | 113 | 53 | 60 |

資料：財務省「法人企業統計」

(注) 各業種内における大企業（資本金10億円以上）と中小企業（資本金1億円未満）との比較で、実際の取引構造までは考慮していない点に留意が必要。

製品等の価格への転嫁の状況

- 製品の価格に労務費を転嫁できていない中小企業が多い。

労務費の価格転嫁状況（サンプル数：12,847社）

| | | 概ね転嫁できた | 一部転嫁できた | 転嫁できなかった |
|-----------------------|--------|---------|---------|--------------|
| 全体 | | 16.2% | 36.4% | 47.4% |
| 特に転嫁が できなかった 業種 | ①印刷 | 6.9% | 20.4% | 72.8% |
| | ②自動車 | 7.0% | 20.6% | 72.4% |
| | ③小売 | 11.7% | 25.9% | 62.4% |
| | ④素形材 | 13.7% | 29.8% | 56.5% |
| | ⑤石油・化学 | 17.1% | 28.6% | 54.3% |

資料：中小企業庁「取引条件改善状況調査（平成30年度）」

< 2つの提案 >

- 関係業界と、現状を共有するとともに、業種ごとの分析を深め、大企業と中小企業がともに成長できるサプライチェーンの在り方を提示する。
- 下請振興法の振興基準（取引ルール）の改訂・遵守の徹底、産業界の自主的な取組の監督強化や下請関係法令の厳正な対応など、取引適正化に向け、具体的な施策を実行する。

【参考】成長戦略実行計画（令和元年6月21日閣議決定）における記載

第4章 6. 中小企業・小規模事業者の生産性向上

親事業者からのコスト低下圧力が原因となって、下請事業者となっている中小企業が賃金や設備投資の水準を上げられない可能性もあることから、利益や付加価値の状況、労働や資本への分配状況等を、産業・業種、企業規模ごとの分析等を行った上で、親事業者と下請事業者との格差が特に大きい産業等を中心に、下請Gメンによる下請事業者の実態把握等も含めて調査を重点的に行うなど、個別の産業に応じた取引関係の課題を明らかにし、競争法制や中小企業法制等をフル活用して、きめ細かな改善を図っていく。

これにより、サプライチェーン全体の中で、大企業と中小企業がコストアップを公正に負担し合ったり、大企業が中小企業のデジタル技術実装に協力したりすることで、中小企業の実態把握等も含めて調査を重点的に行うなど、個別の産業に応じた取引関係の課題を明らかにし、競争法制や中小企業法制等をフル活用して、きめ細かな改善を図っていく。生産性向上を後押しし、経済全体の付加価値を高める、共存共栄の関係を構築する。